

平成25年5月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

## アカマツ林の衰退

国土地理院の5万分の1地図には、その土地の状態が水田、桑畑、針葉樹林、広葉樹林、竹林、荒地など記号で示されています。私の手元に明治40年測図の「五日市」、明治45年部分修正の「青梅」の地図があります。この2枚で青梅市の大半は含まれます。

山林は鍼葉樹林（針葉樹林のこと）、潤葉樹林（広葉樹林のこと）、竹林などと表示されていますが、目に付くのは、霞村の新町から長岡村にかけての地域に桑畑とともに広い面積の鍼葉樹林があることです。この一帯は開発が進みましたが、今でも当時の名残りが雑木林として残っています。霞川や黒沢川流域の丘陵の尾根部にも鍼葉樹林の印が数多くあります。一部にはスギ・ヒノキ人工林もあったでしょうが、鍼葉樹林の多くはアカマツを主林木とする林だったと思われます。マツは建築材、土木材として使われ、今でも梁に太いマツを使った家を見かけることもあります。枝葉は焚付け用としても重宝されたと思います。この状態は戦前まで続いたと思われます。平地林や丘陵部の尾根にはアカマツ林が広く分布していたことが窺えます。

戦時中にはマツの根から飛行機を飛ばす油を採るということで、アカマツは相当伐採・伐根され供出されたようです。戦後の初期、山はハゲ山状態だったと聞きます。やせ地に強いマツが一斉に芽生え戦後のアカマツ林が形成されたと推測されます。最近、伐採したマツ枯れ木の年輪を数えて逆算してみると、大概の木は昭和21～22年に芽生えたものです。

ところが、このマツ林が近年は大きく減少しています。マツは陽樹でやせ地にも強いので、裸地同然の場所には真っ先に進入するパイオニア樹種です。ところが、他の樹種が入ってきて成長してくると後継樹が育たず、マツの比率は低下していきます。もう一つはマツ枯れです。マツ枯れはマツノザイセンチュウという線虫により引き起こされますが、このメカニズムが分かったのも、それ程古い話ではありません。

マツノザイセンチュウは北米原産の線虫で、日本には約100年前に北米から輸入品と共に九州に持ち込まれたと推測されています。マツ枯れは戦前からありましたが、里山が利用されていた時代には、枯れた木はすぐに燃料として利用されていたので、被害も少なかったようです。ところが、燃料革命後の枯れ木が山に放置されるようになった1970年代から、マツ枯れが全国に蔓延し、甚大な被害をもたらすようになりました。1980年前後のピーク時より被害はやや減少していますが、現在も進行中です。青梅市でもアカ

マツが次々に枯死し、被害が大きかった場所ではアカマツの屍が倒木として林内に散乱しています。マツ枯れは現在も進行中です。

マツノザイセンチュウは自力では飛ぶことも長距離移動することもできません。元から日本に生息していたマツノマダラカミキリを寄主としてその体内に入り込み、マツノマダラカミキリに付いて移動します。このカミキリムシは6月頃に成虫になりますが、マツの材から羽脱した成虫は健康なマツの若枝を齧ります。この時に線虫は枝の傷口からマツの組織に侵入します。線虫が感染したマツは樹幹内の水の流れが低下し、やがて水の吸い上げが止まって枯れます。弱ったマツにはマツノマダラカミキリが産卵し、材を食べて成長します。翌年6月には枯死木の中で増殖した線虫を体内に抱えた新しい成虫が出て来て、別のマツに線虫を運ぶこととなります。こうして、次々とマツ枯れが広がっていきます。

元気なマツに薬剤を注入して防除する方法もありますが、薬剤が結構高価なようです。マツ枯れが目立ってくるのは秋から初冬にかけてです。被害に遭った木を放置すれば、被害は年々広がっていきます。マツノマダラカミキリの成虫が羽化してくる以前に、伐採して材に薬剤撒布するか、燃やすか炭にするか、何らかの処分が必要になります。毎年この作業を繰り返す必要があり、アカマツ林の保全は根気のいる作業です。

マツは松竹梅の松であり、正月の松飾りも欠かせません。マツタケは手入れの行き届いたアカマツ林に出るキノコです。松蟬と呼ばれるハルゼミはマツ林に固有のセミです。鍛冶屋さんが鞆（ふいご）を使って鉄を鍛えるのに使っていたのはマツ炭です。マツは日本の風景や文化と深く関わる木です。アカマツ林のある風景を守るとともに復活させたいものです。

(文責 久保田繁男)